2021/06/19 公開

ごうちゃんねる（GO-CHANNEL）　■ユダヤ入門シリーズ■

＃28「シオニズム運動の発火点！衝撃のドレフュス事件とは」

東住吉キリスト集会　　高原 剛一郎 氏

✡-✡-✡

お元気ですか。高原剛一郎です。今日はユダヤ入門シリーズ第 28 弾！パチパチパチ！
いよいよ、イスラエル建国運動のきっかけになった事件について解説したいと思います。
ドレフュス事件と言われてるんですね。

フランス革命の後、ヨーロッパでは徐々にユダヤ人差別が撤回され、撤廃されていきます。
フランスだけでなくフランス以外のヨーロッパの国々も、ユダヤ人の人権を認める・ユダヤ人を我々と同じ国民として迎え入れるという時代が遂にやって来ました。フランス革命は自由・博愛・平等ということで、ユダヤ人も一般国民であるという原則がヨーロッパの他の国々にも伝播していったのです。

これによってようやく「よその国ではない、今住んでいるこの国が、今この場所こそが、我々ユダヤ人にとっても祖国・母国なのだ」と実感できるような法的体制が出来上がっていきました。
そこからユダヤ人の活躍・大進撃が始まっていったのです。

そのように非常に出世し成功した人物の 1 人が、フランス軍のエリート軍人 アルフレッド･ドレフュス（1859-1935）です。彼はフランス東部のアルザスで生まれました。やがて一家はパリに移住し、事業が大成功して、非常に裕福な家の息子として育ちます。

この一家の特徴は同化ユダヤ人です。つまりユダヤ性を捨ててる。
フランスに何百年も住んでいるので、外見はフランス人と全く見分けがつかない。
だけど、ライフスタイルもユダヤ的なものを捨ててるんです。ユダヤ人は豚を食べない。彼らは食べる。
そのように、一般フランス人と同じライフスタイルをしている家庭で育ちました。

ドレフュスはパリの名門 工学院を出て、技術将校として職業軍人になり、弱冠 34 歳でフランス軍の中枢部/フランス参謀本部に抜擢されます。当時フランス参謀本部に勤務しているユダヤ人は彼以外いません。
だから、ユダヤ人の中でも飛び抜けて出世している 信用の篤い男だと言えます。
ところがですね、参謀本部に入って 2 年後、彼は大事件に巻き込まれてしまうんです。

パリのドイツ大使館に、シュヴァルツコッペンというドイツ軍の武官がいました。
彼がなぜパリにいるのかというと、フランス陸軍の情報を盗み取るためです。そのためには協力者が必要ですね。実はフランス陸軍の上層部の中に、ドイツの手先となって働いているスパイがいる。
そのスパイがシュヴァルツコッペンに極秘文書を流してた。フランス情報部がそれを入手することに成功したんです。それを入手した人物はアンリ中佐。

アンリ中佐は「その極秘スパイ文書をずっと調べていくうちに、その筆跡がドレフュスのものとそっくりであることを突き止めた」と言うんですね。ドレフュスはこの筆跡問題に基づいて逮捕され、軍法会議にかけられました。そして終身刑を受けたんです。

南米ギアナの大西洋の絶海の孤島、その名も“悪魔島（あくまとう）”。

昔『パピヨン』という映画がありました。大海原のど真ん中にある島がまるまる刑務所。
そこから脱出するという映画『パピヨン』。そのモデルとなったのが悪魔島の刑務所ですよ。
そこから死ぬまで出て来れないという判決を受けて、そこに送られたんです。

彼が悪魔島に送られる前、軍人として最大の侮辱を受ける儀式が行われました。
フランス士官学校の校庭で、並み居る人々の前で、まず階級章をもぎ取られ、そして腰に帯びていたサーベルが取り上げられ、真っ二つにパーン！へし折られました。
軍人として最低最悪の侮辱を受けて、「この裏切り者！」ということで悪魔島に送られたんです。

その様子を見ていた人々がみな、口々に言った言葉がこれです。
「ユダヤ人を殺せ！」「ユダヤ人を追放しろ！」「ユダヤ人を吊るせ！」

ドレフュスを殺せ、ドレフュスを許すな、ドレフュスは終身刑にふさわしい…など、ドレフュス個人への非難なら分かりますが、そこで巻き起こった怒りの矛先は、ドレフュス個人ではなくユダヤ民族への怒りにすり替わってたんですね。

実はこの事件、後で分かるのですが冤罪だったんです。真犯人が捕まったんですね。
真犯人のうちの 1 人は取り調べをしたアンリですよ。アンリ中佐は、自分が追及していったのが全部偽造文書だと分かって、最終的には自殺しました。本当の張本人はエステルアジ少佐ですが、彼はイギリスに亡命しています。

とにかく全くの冤罪。汚名を着せられ、最大の屈辱を受けながら、ドレフュスは大声で叫びます。
「貴官たちは、諸君は、無実の人間を貶めている！ 私は潔白だ！ 私は裏切ってない！」
そして最後にひと言、大声で「フランス万歳！」
今フランス軍部によって軍法会議にかけられて、身に覚えのない事で汚名を着せられてるんですよ。
しかし、彼の心は正真正銘の愛国者で、フランスを心の底から愛する愛国者だったということなんです。

さて、このことはヨーロッパ中のユダヤ人に、2 つの大きな衝撃を与えました。
■ドレフュスはユダヤ性を完全に放棄した同化ユダヤ人だった。
すなわち、長い髭・黒い服・何言ってんだかよく分からない、得体のしれない古代ヘブライ語をぶつぶつつぶやきながら、ペンギンみたいに体を前後に揺すって。私たちとは異質の集団。そんなんじゃないんです。
彼は同化ユダヤ人なんですよ。彼のライフスタイルはフランス人そのもの。
彼の心はフランスへの愛国心で燃え上がっています。罰を受ける時ですら「フランス万歳！」と言って、粛々とその刑に服する。そんな人物ですよ。

そんな人物が「ユダヤ人は追放すべきだ！」という声の中で悪魔島に送られていくのを見た時、多くのユダヤ人たちは本当に考え込んでしまったんですね。

ユダヤ人のほうでユダヤ性を捨てても、フランスのほうではユダヤ人を同化させてくれない。
なんぼユダヤ人がユダヤ人であるというこだわりを捨てて、“フランス人になろう。”“もうなってる。”
“意識の上でも外見上でも、もうフランス人だ” であったとしても、フランスはユダヤ人を自分の国民・仲間だと受け入れてくれない。向こうが同化を許してくれない。ということが明らかになったのです。

■ドレフュス事件が、あろうことかヨーロッパでリベラリズムの最も中心の、そして、フランス革命で自由・博愛・平等の考え方を全ヨーロッパに広めていったフランスで起こったということ。

ユダヤ人に最も理解があり、ユダヤ解放の先鞭をつけた国でさえも、このようにユダヤ人に対する偏見が根深く残っている。であるなら、ましてやヨーロッパの他の国々は、ユダヤ人への偏見が根深く残ってるんじゃないですか？ 普段はそういうことが明らかにならないでしょう。しかし何らかのきっかけがあった時、くすぶっていた反ユダヤ主義の炎がまたブワーッと燃え上がってしまう。
つまり、ヨーロッパの中に安息の地は無いということなんですね。では、どうしたらいいのか？

この事件の一部始終をジャーナリストとしてずーっと調査し、取材し、見ていた人物がいました。
テオドール･ヘルツル（1860-1904）です。彼が下した結論はこうです。
「ユダヤ人は、今住んでいる所に同化しようと どんなに頑張っても受け入れられることはない。
ユダヤ人が平安に生きるためにはどうしたらいいのか。それは、ユダヤ人がユダヤ人の国を造ることだ。
ユダヤ人はユダヤ人の国を造ろうではないか。」これをシオニズムと言います。

シオニズムについて『ユダヤ人国家』という本を書いて、シオニズムの本格的な潮流を作っていった人物こそがテオドール･ヘルツルです。ヘルツルのシオニズムの考え方に火をつけた事件、それがドレフュス事件だったのですね。

さあ、いよいよ現代イスラエル建国の歴史がこれから始まります。
また 楽しみにご覧頂いたらなと思います。また このチャンネルでお目にかかりましょう。
それまで皆さん、お元気でいらしてください。さよなら！